
八不思議

桜原桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八不思議

【ZINEアート】

N7358U

【作者名】

桜原 桜

【あらすじ】

七不思議ゲーム……

それは不思議な現象をすべて見つけるゲームである。

最後までクリアしたら何でも願いが叶う……

1

「起きて、起きて……起きるー。今日から夏休みだよ。」
はあ。また、うるさい妹のアミに起こされた。えーと、今何時だ。

オレは時計の方を見た。……

「おいつ、四時つて早すぎるだろ。」

「だつてだつて、いっぱい遊びたいんだもん。」

オレは再び寝ようとしたけど、アミがオレの体の上にのっかつて目
が完全に覚めてしまった。はあ、せっかくの夏休みなのにゆっくり
させてくれよな。だから、七時になるまで本や漫画を読んだりした。
相変わらずアミはテンションが高い。オレの隣ですつとはしゃいで
いる。オレは大きなため息をついた。

七時になった。オレは、目の下にくまをつくつてアミと階段を下
に降りる。下では、母が朝ご飯を作っていた。

「おはよ。」

アミが元気な声で言った。

「お、はよう……。」

元気ない声で挨拶したオレに母は、

「おはよう。一人とも今日から夏休みだから早いわね。ハルト、さ
ては、アミに起こされたんでしょう。」

「はあ……。すつじい迷惑だよ。おかげで思つ存分寝れなかつたよ
……。」

そんなオレに母は、

「まあまあ、早起きした分は遊べる時間が多くなるから今日は絶対
良いことあるわよ。それより一人とも朝ご飯出来たから食べましょ
う。」

2

おれは、怒り、悲しみながら朝ご飯を食べた。

「そういえば、父さんは。」

「もう仕事言つたわよ。」

「相変わらず仕事早いな。」

「ハルト、夏休みの計画はしてる?。」

母が、訊く。

「はいはい。今からやりますよ。」

「今年こそ、夏休みの最後にまとめて宿題をしないでね。後で、大変なことになるわよ。」

「へいへい。」

やる気のない返事。すると、

「アミはね、もつ計画たてたよ。偉いでしょー。」

母は、

「偉~い。アミはハルトと大違いね。」

アミはオレの方を見て、上目線でフ.....と、人をバカにしたような目で見る。

「こんの一。やるか。」

バンッ

母が食卓を叩いた。すると、少し微笑んだ顔で、

「やめなさい。」

こ、怖い.....。

オレとアミは、

「す、すみません.....。」

つと、謝つた。

「あつ、やっぱつ、もうこんな時間。」

今、時計は八時になつていた。

おれは、ある用事を思い出して、自分の部屋へ戻り、着替えて財布をポケットにしまい、玄関の方へ向かつた。

「ハルト、どうしたのよ。そんなに急いで.....。」

母が首を傾げながら言う。

「今日、八時にダイスケ達と遊ぶ約束していたんだ。」

「じゃあ、アミも連れてつてー。」

「後ろからアミが両手を上手に振つて俺に頼む。」

「だめだ。おまえがいるといひたくて、遊べなくなる。」

「えー。お願い。」

オレはきつぱり言った。

「だめ。」

「ケチッ。」

アミは舌打ちをした。

「じやつ、行つて来ます。」

「行つてらつしゃい。」

母が手を振る。アミはまだ怒つている。

2

オレ達の住んでいいる町は都心から離れているため比較的静かだ。物騒というより平穏だ。ただ、近くに廃墟となつたビルがある。そこは、不良のたまり場で有名で、みんな恐怖に脅え、不気味に思い近づこうと思うやつはあまりいない。

まさか、オレが後であの廃墟地に行くことになるとは……。

十分後

「おつそーい。ハルト。いつおまえは遅刻せずに済むんだ。」

送れたオレに、ビシッと言つたのは、とてもしつかり者で、リーダー的存在のダイスケだ。

「あー。ごめんごめん。」

「もしかして、遅れた理由つてあれ。」

「そう、そのあれ。」

いつも、オレのことをお見通しのナナ。

「また、妹とケンカしたの。」

「うん、なんだ。」

「つちは、とつても秀才で、おとなしい性格のサキ。

「あーあ。あいつのせいで遅れたじゃねーかよ。はあ……。」

「だ・け・ど、言い訳はなし。遅刻は遅刻だ。」

ダイスケが大きな声で横から言つてきた。

「え、え～。」

「というわけで……、遅刻した罰で、オレ達の夏休みの宿題の数学のプリントやつてもらうからな。」

「え、え～。……はあ……。」

何か今日、ため息多くないか。オレ達の決まりは、遅刻したらひとつだけ言うことを訊かなければいけないルールがある。

「ほい。」

「はい。」

「はい。」

三人分、自分合わせて四人分の数学のプリントがオレの手のひらにある。とほほ……。

でも、こう見えて、オレ達四人は幼なじみで、大の仲良しなんだ。バンッ

「な、なんだよ。」

いてて。ダイスケがオレの頭を叩いた。

「なあ、ハルト。おまえ、レポートやる？」

「え、ああ。オレはやるよ。内申上がるから。」

「相変わらず、まじめだね。じゃあ、オレもやろうかな。」

「やつた方が良いんじゃない?」

そして、ミナが、

「で、テーマは決まった?」

「今、悩んでいる……。」

オレ達が今悩んでいるレポートのテーマは「自由」で何やつてもいいから余計に悩む。するとサキが、

「じゃあ、今、学校でもインターネットでも噂になつてている『七不思議ゲーム』ってのはどう?」

サキのその言葉に辺りが静かになつた。間が長い。オレは「クリ
ヒ、つばを飲み込んだ。

「サ、サキ。じょ、冗談はやめてよね。」

ミナがびくびくしながら言つた。オレはサキに、

「そ、そうだよ。冗談はやめろよ。ダイスケも何か言いなよ。冗談
はやめなつて。」

「……。」

「ダ、ダイスケ……？」

「……。」

ダイスケは黙つたままだ。

「い、一応サキ、それはやめよう。」

サキは、

「自分たちで七不思議全部見つけて、それをレポートにまとめたら
いいんじやない？簡単でしょ。」

「そ、それはそただけど……。やつぱりやめよう。なつ。」

「そうだよ。」

と、オレとミナが反対する。一人が反対する理由はある。それは……
ガバッ

いきなりダイスケがオレの肩に腕をのせる。

「いいね。いいね。」

「は？」

「やうひー・面白やつだな。オレ達で七不思議調べよいわ。」

「えつー。」

オレとミナが一緒に叫んだ。

「ちよひー、ちよつと待つてよ。七不思議ゲームひとつどんなか分か
る？」「

ミナが慌てて言つ。慌てるのも無理はない。

その、『七不思議ゲーム』については裏では「いつばれてこる。

「闇のゲーム」と……。

今から、約十六年ほど前から流行っているゲームだ。みんなが思う、テレビゲームなどの普通のゲームとは違う。自分たちで動き、知識を使いながら、変な現象が起こる場所を探すというゲームだ。そして、その場所全部見つけたら、何か一つだけ願いが叶うというのだ。まさか、こんなばかばかしいゲームが実在するとは誰も思わないだろう。だから、一年前、インチキを見破ろうとしたオレの叔父は、そのゲームに参加した。もう、それっきり叔父は見ていない。こんな感じで今も、行方不明者が続出しているとのことだ……。

ダイスケが、

「当たり前だよ。分かるよ。そんなこと。学校言つてもインターネット見ても、ニュース見ても、その話ばつかだから。」

「だつたら……。やつぱりやめようよ。」

ミナはずっと反対している。するとサキが、

「去年も一昨年の夏休みって、同じ事の繰り返しでつまんないよ。今年はスリルがあつたほうがいいでしょ。」

なんだかオレはサキがなぜだか、頼もしく見えた。

「そうだよ。そうだよ。四人で行けばどーってことないって!それに……クリアすると一つだけ何でも願いが叶うんだぜ。レポートも終わって、願いも叶うなんて一石二鳥だと思わないか!/?なつ。」

「そ、そりゃあそうだけど……。」

オレは一瞬迷った。やるか、やらないか……。

「で、でも長い間家を開けとくのはやばくない?」
「うう見えてもオレら高」なんなんだし……。」

サキが、

「友達の家に泊まり行くって言えれば良いだけの話でしょ。」

「あー、そつか。」

オレとダイスケはサキの言葉に納得した。

「よしつ! 行くか!」

と、ダイスケ

「そうだな。」

「そうだね。」

と、オレとサキ

「ちょ、ちょっと待つてよ何三人で決めてるの！私は絶対に行かないからね！絶対に！三人とも後悔しても知らないからね！」

「じゃ、ミナはお留守番だ。」

「私たちは夏休みの間スリルを楽しんでおくよ。」

「もういい。じゃつ、今度会うときは生きて会えたらね。」

ミナは怒って、家に帰つていった。

「どうする？帰つたけど。やつぱりやめておく？」

オレは迷つた。

「私が後で電話しておくれよ。」

「それより、出発は明日なつ！…

と、ダイスケ

「え！明日！』

「そうだ早く言つて早く帰つてきた方がいいだろ？」

「そうね。レポートのまとめる時間も考へないとね。」

「つていうことで、明日必要なものを持つてオレの家に、朝七時集

合な！ノートと筆記用具忘れるなよ。」

やつぱりダイスケはしつかり者だ。

「なんだか三人で旅行に行くみたいだね。」

「ミナも一緒に行きたかったな……。」

オレは半分楽しくて半分悲しい気持ちになつた。

「それと七不思議ゲームのことは絶対に親には言わないこと分かつたな。」

「じゃ、私は明日の準備するから帰るね。ばいばい。」

「オレも。じゃあなハルト。」

「ああ。」

オレは一人に手を振つた。さて、家帰つて準備するか！明日、アミ

に知られずに氣をつけなきゃな。

4

「ただいま。」

「お帰りなさい。あら、早いわねハルト。どうしたの？」

「母さん。ちょっと話が。」

「ん？」

オレと母は食卓に腰掛けた。

「絶対にアリには言わないでちょうどいい。母さん。」「内容によるわね。」

「明日、ダイスケと友達の家に泊まりに行くから。いい？」「うへん。それはお父さんに聞かないと分からないな。でも、お母さんは良いわよ。夏休みくらい友達といたいからね。」

母は笑つて答えた。

「ありがとう。それと、アリは絶対に言わないでくれ。お願ひします。」「

「どうしようかな～。」「

「お願いします。」

オレは必死になつた。

「分かつたわ。でも、今日の夕飯の食器洗い頼んだわよ。」「ありがとうござります。」

良かつた。

「明日何時に出るの？」

「七時までにダイスケの家に行く。」

「やつ、起きれるかしら～。」

母はにやけている。

「起きれるよ～。」

「氣をつけてね。携帯はもつて行きなさいよ。」「

「うん。」

「楽しみなさこよ。」

「うん。……つてこいつても、その前に父をここに許可もいわなことね。

「 セウね。」

オレはひとまず安心した。

5

八時になつた。

「まつ。こんなもんだらひ。明日楽しんだな。つてこいつても怖いゲームに参加するけど……。」

ガチャツ

「ただいま。」

父が帰つてきた。あれ? 珍しい! こんなに早く帰つてくるなんて。 そつやひ、その前に、オレは階段を下りた。

「お帰りなさい、父さん。今日は早いね。」

「ああ、今日は早く終わつたんだ。」

すると、母が、

「あなた、ハルトがあなたに話があるんですつて。」

「なんだ、ハルト。」

「ええ……と……実は……」

オレは母さんに話したことを全部囁つた。

「そうか、いいぞ。」

「……えつ、そんなあつれつー。」

「だつて、ハルトも、もつ高[タカ]だる。楽しめよ。」

「あ、うん。」

良かつた。父が笑いながら、

「いなくなるなよ。」

「?う、うん。」

「さて、飯だ。ハルト、アリを呼んできなせ。」

「うん。」

そして、タジ飯を食べて、母との約束の食器洗いを済ませた。すると、アミが

「お兄ちゃん。良いことあつた? 食器洗いするなんて珍しいね。何か隠し事していない?」「ドキッするどいつ!

「何もないよ。」

「うーん。」

「さあ、寝よ! あー眠い、じゃおやすみ~。」

「おやすみなさい。」

朝

♪♪♪♪♪

六時にセットしていた田舎ましが鳴った。

「よしつ、起きるか。」

久しぶりに朝にすつきり起きた。

「おはよ。」

「おはよ。珍しく一人で早く起きたわね。」

相変わらず、お母さんは起きるのが早い。

「父さんは?」

「仕事よ。」

「やつぱり。」

「アミは?」

「寝てる。」

母さんは笑いながら言った。

「よつしゃ。」

そして、朝ご飯を食べた。

六時四十分になつた。オレは、八分で着替えて、荷物を持ち、玄関へ出た。

「じゃつー言ひてきます。」

「いつてらつしゃい。」

母は微笑んで手を振つた。そして、おれは、家を後にした。

十分後

ぎりぎりセーフ。腕時計を見ると残り一分だつた。

ピンポーン

「おつ、今日は遅れなかつたな。」

「おはよう。サキは？」

「おはよう。」

サキが来た。

「おう。おはよう。」

と、ダイスケ。

「母さん行つて来る。」

「ダイスケ。気をつけなさいよ。人様には迷惑かけるんじゃないよ
つ。」

ダイスケのお母さんは優しいけどオレはちよつと怖い……。

「おうつ！行こう。」

「待つてつ！私も行く！」

「！」

「ミナつ！」

ミナが走つてくる。

「ハアハア、わ、私も一緒に行く！」

息を切らしている。

「サキから電話で聞いた後、考えたんだけどせつかくの四人での夏
休みだから一緒に行かないこと、思つて……。」

「そうだな、四人でオレ達だ！全員集合だな。」

ダイスケが笑いながら言つた。

「でも、いつもの分かるよな。遅刻したら罰だつて言つこと。」

「そうだね。じゃあ……、私たちと一緒に七不思議ゲームに参加す
ること。」

サキが笑顔で言つた。ミナは、

「うんっ！」

「よし、行こう。」

とオレが言った。

「……でどこからが七不思議ゲームの始まり？」
ミナが言つてきた。

「知らん。」

「知らない。」

「私も、知らない。」

四人は黙つた。オレ達は無計画に行こうつて言つたオレ達に笑つた。
すると、サキが

「私の叔父さんになぜか、七不思議ゲームについて詳しい人がいる
よ。その家に行つて聞こつ。」

「そうだな。まずは聞き込み調査からだな。」

ダイスケとオレ達は大きな鞄を持つてサキの叔父さんの家に行つた。

7

「叔父さん。サキだけぞー。いるー？」

サキが叔父さんの家の玄関の前で大きな声を呼んだ。そうしたら、
ガチャツと、ドアが開いた。

「ん？ おー、サキじゃないか！ 久しづりだな。おっ、友達も一緒か。
朝早くどうした、みんなで大きな鞄持つてどうした？」

家から出でてきたのは、五十代～六十代位のサキの叔父さんが出てき
た。

「おはようござります。朝早くすみません。お尋ねしたいことがあります
つて来ました。少しお時間良いですか？」

ダイスケが丁重に言つた。

「ん？ そなのかいサキ？」

「うん。」

「それより、外は日射病になりやすい。中に入りなさい。」

「おじやまします。」

叔父さんの家は古風な感じがする。広いリビングのいすに座る。ふかふかして気持ちがいい。ミナが棚の上の女人が写った写真を見つけた。

「この人は奥さんですか？おきれいですね。」

「そうだよ。だけど一年前に亡くなつたよ。」

「あ、すいません。」

ミナはショボンとした。

「いいさ、それより聞きたいことは？」

すると、サキが、

「夏休みの宿題のレポートをまとめるために七不思議ゲームのことを探査しようと思ったの。叔父さんとても詳しいから聞きに来たの。一番最初の七不思議って何？」

叔父さんの顔が青ざめた。

「それは本気で言つているのかい？」

「？はい。」

周りの空気が重く感じた。

「やめておきなさい。あのゲームに一度でも足を踏み入れるとクリアするまで一度と戻れない。」

そんな叔父さんにダイスケは、

「ちょっと、冗談はやめてください。もしそうだとしても何故あなたは知つているんですか？」

「……。」

ダイスケの質問に叔父さんとの会話に間が出来た。すると、叔父さんは立ち上がり、奥さんの写真が置いている棚の側に行つた。

「実は……私の家内は二年前に亡くなつたんじゃない。その七不思議ゲームに足を踏み入れ行方不明になつたままなんだ。行方不明になつた親友を探しにね……。」

「え……。」

オレ達は言葉を失つた。何て言えばいいのか……。

「そしたら、私の友人がゲームに参加して探してくると言つて、そ

のまま、その友人も行方不明になつた。でも、一週間ぐらいでその友人がそのゲームをクリアして戻つてきた。……だがそこには家の姿はなかつた。友人は探しなかつたと言つていた。それから私は友人は、友人のその中の出来事をまとめながら七不思議ゲームの研究をした。そして、分からなかつたことが分かつた。」

叔父さんの話を聞いていると、不安になつてきました。七不思議ゲームに参加するか、参加しないか……。

「オレ、行くのやめておこうかな。」

「何言つてんだよ！男だろ。」

落ち込んでいるオレにダイスケが怒つてきた。

「オレ達が一度決めたことは諦めたらダメだ。
で、でも。」

「大丈夫。四人で行けば何とかなるよ。」

とミナがオレに言つ。そんなオレ達に叔父さんは、

「はは、こんな体験談を話しても後ろ目足りしない君たちはすごいね。だめだつと言つても聞かなさそうだ。では、どんな現象が現れるのかは話せないけど、七不思議ゲームに参加できる七不思議の一つ目の場所を教えよう……。」

ゴクリッと緊張がはしつた。

「それは……、世界中どこにでもある廃墟となつたビルの屋上……。」

「

「廃墟になつたビルの屋上？」

意味が分からなかつた。まさか、オレ達のすぐ近くに七不思議ゲームの入り口があつたなんて……。

「ああ、そうだ。廃墟となつたビルは世界中どこにでもあるよね？」

「……つてことは、世界のどこからでも参加が出来ると言うことだ。」「……つてことは、世界中で行方不明者がいるつて事？叔父さん。」

「さすがサキだね。そうだ、このゲームに参加して犠牲になつた人が大勢いるんだ。」

オレ達はゾッとした。体全身に鳥肌が立つた。

「でも何故、どんな現象が現れるのかは教えてくれないんですか？」

ミナが叔父さんに質問した。

「実は私も知らないんだ。だが、もし知つていたとしても、ゲームにはルールがある。場所はいいが、現象のことについてはルール違反になる。口を滑らせそのことを言つと、その先には恐ろしいものがあるらしい。その恐ろしいことも友人は教えてくれなかつたが……。つていつも答えを教えられるやつはこの世で4人しかいないけどね。その友人はこの七不思議ゲームをクリアできた四人の中の一人だつたんだ。」

「その友人つて人はすごい人だつたんですね。」

叔父さんは微笑んだ。

「よしつ。」

ダイスケがいきなり立つた。

「おまえら行くぞっ。なんだか、この話聞いて面白くなつてきた。早く言つて早く帰ろうぜ。」

「そうね。四人もクリアした人がいるって事は私たちが出来ないことはないからね。」

「サキが目を輝かして言った。

「幸運を祈るよ。そして、もし家内を見つけたら連れ戻してくれないか？」

「分かりました。」

そして、オレ達は叔父さんの家を後にした。そして、叔父さんに教えてもらつた廃墟になつたビルへと向かつた。

2

「ここだな。やっぱりここはいつ見ても不気味だ。」

オレ達は廃墟になつたビルの前で立ち止まり改めて思つた。

「でも、四人一緒だから大丈夫だよ。」

と、ミナ。

「さてつ、行くか。心の準備は良いか？まずは、屋上へ行こう。不良どもには気をつけよう。」

そういうえば、不良がいたことを忘れていた。見つからないように行かないとな。

「お兄ちゃん。」

？なんだか聞き慣れた声が後ろから聞こえたが……。後ろを振り返つてみると……アミだ……。

「おまえどうしてここにいる。それに大きな鞄持つて。」

アミはニタニタ笑つている。

「昨日のお兄ちゃんとお母さんの話聞いたやつだ。友達の家に泊まりに行くんじやなかつたの？」

「ねえ。お兄ちゃん。七不思議ゲームに参加するんでしょ。だつたんでいる。」

「アミも行く！」

「はあ。おまえ何言つていい。だめだつ！」

「そりだよ。だめだよ。アミちゃんはまだ小学生なのに危険だよ。」

とサキがアミを止めた。でもアミは、

「アミも行くつ。連れて行かないとお母さんと全部このことを言つからね。」

「なつ。でも、母さんには何て言つ。アミがいなくなつたら。母さん困るだろ！」

「お兄ちゃんと一緒に行きますつて紙に書いたもんね。」

「ほんの～。どうするダイスケ。」

ダイスケは困つた顔をしている。

「親にこの事ばれるのは「めんだな。仕方ないアミちゃんも連れて行くか。」

アミはすつじい喜んでいる。はあ～。お荷物が増えた。これから大丈夫なのか心配になつてきた。

「でも、アミちゃんお約束があるよ。」

ミナがアミに言つた。

「絶対に勝手な行動や、はぐれたらダメだよ。このゲームは危険だから。」

アミは、

「は～い。」

といつて黙つた。

「よしつ。一人増えたけど行くぞ。」

と、ダイスケが廃墟のビルに足を踏み入れた。それに続いてオレ達も足を踏み入れた。

廃墟になつたビルの中はひび割れが多い。明かりがあまり入つてこないため中は暗く、不気味な空気が漂つている。蜘蛛の巣が天井には多く見られる。そして、あちら

こちらからカサカサつていいいう動物

や虫が動いている音がする。床には、不良達が飲み食いした後の弁当箱や空き缶が捨てられている。

「このビルは確かに四回だつたはずだ。こんな気味悪いところ早く出ようぜ。」

ダイスケは結構どうぞうとしているが、サキとミナはくつついて歩いていく。アミはなぜだか怖がっていない。興味津々に楽しんでいる。

ワハハハハ ワハハハハ

奥から人の笑い声がする。不良だ。声がオレ達の方に近付いてくる。

「隠れろっ！」

ダイスケがオレ達に指示をした。オレ達は、階段の隣の壁に隠れた。オレと、ダイスケがのぞいてみると、そこには身長百八十センチぐらいの不良が四人いた。耳にはピアスをしており指や首には大量のアクセサリーを付けていた。

「やばいな。あれば力負けする。別の場所から行こう。」

「ああ、そうだな。」

すると、

カラソカラソ

空き缶が転がる音がした。後ろを見るとアミが踏んでしまったらしい。不良達が、その音に気付きオレ達に近付いてくる。

「だれだっ！」

不良達が走ってきた。

「逃げよう！」

ダイスケがオレ達に言い、みんな全速力で走った。

「待てっ！」

後ろから不良が追いかけてくる。必死に走った。

ドタッ

アミがつまづいた。やばい。後ろから不良達が走ってくる。オレは

立ち止まり、

「大丈夫か？」

アミは泣きそうな顔をしているが、我慢して立ち上がった。

「ハルト、速く！」

サキとミナが走りながら言ひ。すると、アミが、

「大丈夫。」

今にも泣きそうな顔をしてくる。

「さ、行こう。」

そして、走つた。これまでにない速さで！

ドンッ

「？」

何かにぶつかつた。見てみると、ダイスケの背中にぶつかつた。横を見てみると、サキとミナが立ち止まつていて。どうしたのだろうと前を見てみると……不良が五人ほどいた。後ろからは三人の不良達が来た。するとダイスケが左の方にあつた階段に向かつて走つた。それにつられ、オレ達も走つた。すると、

「まちやがれー！」

不良達が追いかけてきた。オレ達は階段を上つた。息を切らせて脇腹が痛い。汗が額から流れてくる。

バンッ

屋上に着いた。不良達も俺たちに続いて後ろから追いかけた。

「ガキ、ただちやすまねーぞ。手こずらせやがつて。」

「くつ。追いつめられた。」

ダイスケが息を切らせながら不良達を睨む。不良達もオレ達も息を切らせた。

「それより、サキの叔父さん屋上つて言つていたよな。何もないじやないかよ。」

「どうする？ オレ達このままじゃつかまつてしまつぞ。ダイスケ。」
オレとダイスケの後ろではサキとミナそしてアミが震えている。前には不良が八人。今のオレ達には勝てっこない。どうする。どうす

れば……。オレは思つた。やがて来るとじやなかつた。こんな危険なことになるなら、七不思議なんかに関わらなければ良かつたと……。でも、過去の事を嘆いても何も変わらない。オレはどうなつても良いからダイスケ、サキ、ミナ、アミみんな助かつてくれ……。

「やつちまえー。」

不良達が俺たちに拳をあげておそりてくる。もうだめだつー…そう思い田を閉じた。

「？」

攻撃が来ない。どうしたんだ？ そう思ひ田をおそるおそる開けてみた。不良達は顔が青ざめて止まっている。

「？」

不良達の田を見てみると、俺たちの後ろにあるものに青ざめているらしい。ダイスケの方を見てみると、ダイスケも後ろを見て青ざめている。何だつ！ オレは後ろを向いた。

「！」

それは、これからオレ達が参加する七不思議ゲームの入り口。長く天に続く「白い階段」が……。

4

「な、なんだこれ」

言葉にならない。恐怖と美しさが半々の階段だつた。

「う、うわー。」

さつきまでなかつた階段に驚き不良達は逃げて行つた。今時間は昼間もあるのに白い階段の周りは暗く、夜のような雰囲気がした。

「もしかしたら、これが七不思議ゲームの入り口？」

ダイスケが田を丸くして言つ。

「多分そうかも。……きれい……。」

とサキ。

「みんな、どうする？ 行く？」

そう、ミナが言つとオレ達は黙つた。するとアミが、

「行くー。行くー。」

アミの一言でオレは笑つた。

「そうだな。行こうー。ここまで来たんだ。」

その言葉にダイスケ、サキ、ミナが首を縦に振つた。

「行こうー。」

「だが、その前に……。みんなで約束な。絶対にみんなでクリアして一緒に帰ること。分かつたな！」

そのダイスケの言葉に、

「ああ。」

「うん。」

「うん。」

「はーい。」

「よろしい！』

そして、オレ達は「白い階段」の段を一步一歩と上つて行つた。

興味の心と恐怖の心を一つ抱え、五感を奮い上がらせながら未知の場所へと……。

5

「なあ、ハルト。この階段、いくら何でも長すぎないか？」

ダイスケが息を切らせながら言つ。確かにそうだ。長い、長すぎる。

「す、少し休憩しないか。さすがのオレでも疲れた。」

「そうだな。サキやミナはともかく、アミちゃんが倒れそうだな。」

そして、オレ達は階段の途中で腰掛けた。

「ねえ、ハルト。私達、もう一時間くらいは階段登つているよね？」

サキが困った顔をして言つ。

「地上はとっくに見えなくなつたけど、先も見えないなんて、降りるのも登るのも大変だよ。」

ミナは頭を抱える。アミは、疲れで話すらしない。

「でも、階段があるって事はその先があるって言つことだ。後もう少し頑張ろう。」

ダイスケが立ち上がり、階段を先、登り始めた。続いて、ミナ、サキも登り始めた。

「アミ、大丈夫か？」

アミから返事がない。

「置いて行かれるぞ。」

そう言うとアミは首を横にフルフルと振る。

「でも、登らないと置いて行かれるぞ。」

するとアミが小声で、

「アミ、これくらいビリッて事ない。」

「そうか、じゃ行くぞ。つらいときは兄けやんに話つんだぞ。」

「うん。」

アミはそう言い、オレとアミは登り始めた。

「はっ、はっ、はっ、ふー」

また、呼吸が荒くなつてきた。今、ダイスケと、オレの距離は離れている。

「おーい、ダイスケ。階段の先は見えてきた?」

オレの言葉にダイスケは振り向いた。すると、

「ハルト! 走れ!」

「?」

ダイスケの顔が赤から青ざめている。続いてサキとミナも……。

バキッ……バキバキ……バキ……

「ハルト! 後ろー!」

バツ! 階段が崩れて来ている!

「アミつー走るぞー!」

オレはアミの手を取り、階段を全速力で上つた。後ろから異様な音が近づいてくる。ダイスケ達も走っている。

「!」

いきなりダイスケが後ろに振り向いた。

「扉が見えたぞー。急げー。」

「よしつ。アミ、もう一息だ。頑張るぞ。」

「うん。」

オレもアミも他のみんなも息をゼイゼイさせながら全速力で走った！
ガンッ！

アミが段差につまづいた。オレは立ち止まり、

「大丈夫か？」

後ろからバキ……バキ……と、ひび割れが近付いてくる。

「アミちゃん！速く！」

バキ……バキ……もう、駄目だつ……

ドンッ

「？」

オレとアミの目の前でひび割れが止まり、ひびが入った階段が下に落ちた。

「た、助かった……。」

「ハルト！アミちゃん！大丈夫か？」

ダイスケ達が近付いてくる。

「ふー。死ぬかと思った。」

オレは目を丸くして息を吐いた。アミは泣きそうな顔をしている。

「もう大丈夫だぞ、アミ。」

「そうだよ。それに後もうちょっとこの長い階段とはおさらばだよ。さ、頑張るう。」

サキがアミに手を取り、みんなで扉に向かった。

6

オレ達四人は扉の前で呆然としていた。

「七不思議つて、すべてがあり得ない。さすがに、この扉はでかすぎるだろ？！」

その扉は真っ白く綺麗な彫刻が入っていてとても美しいく、高さが約二十メートルはある。この、扉の向こうがオレ達が目指している

七不思議ゲームの世界……。そう思つとわくわくしてたまらないみんなもそつだらう。その時のオレ達はいつたいどんなものが待ちかまえているのか不安といつのがあまりなかつた。

「開けるぞ。」

ダイスケのその言葉に右の扉にミナとダイスケ、左の扉にオレとサキとミナが同時に押した。すると、少しづつ少しづつガガ、ガガ、と、開いていった。

「え……？」

扉の中に扉？ それも開けた扉よりも少し小さい。そして、その少し小さい扉も開けた。

「ええ……また！」

次はオレの膝くらいの小さい扉が出てきた。

「……。」

みんな黙つたままアミが扉を開け。一人ずつくぐつた。

「これも開ける？ ハルト。」

ミナが失笑している。そこにはとてつもなく大きな扉があつた。

「さすがにこれは開けられないよ。」

「一応押してみようぜ。」

そしてオレ達は歯を食いしばり思いつきり押した。

「駄目だ。びくりともしない。」

困つた、どうしよう。これじゃは進めない。

みんなの周りに諦めの雰囲気が漂つた。

「ふつ。」

「！？」

扉の隣で微かな笑い声が聞こえた。

「何でみんなそんな開け方をするんだらう。」

隣で小学校四年生くらいの男の子が笑つていた。

「誰！？」

男の子はオレ達に近付いて言った。

「ボクはユウ。お兄ちゃん達は？」

みんな唖然としている。

サキがユウという男の子に質問した。

「あれ？ つてことは、私達以外にもここに来ているってこと？」

「うん、そうだよ。」

やつぱりここは七不思議ゲームの入り口だつたんだ。

「ねえ。ここのは扉はどうやって開けるの？」

ミナが不思議に思いながら呟つ。

「その扉は開けても開けても出でてくる扉だよ。でも、その扉を開けるには方法が一つあるよ。」

「開けるには……？」

いつたいどうやればいいのか耳を傾けた。鍵を使うのかな？ それとも入り口は本当は別の場所にあるのかな？ オレは早く知りたくて焦らした。

「押すんじゃないで、引くんだよ。」

「……は？」

「だから、引けばいいの。」

「……。そんな簡単なこと！？」

「うん。何故かここに来る人ほとんど押すから最初はびっくりしたよ。引くって言う考えはないのかな？」

「ブツ。……アハハハハハ。」

「そんなことだつたんだ。」

オレ達は思わず笑つた。

「でも、こんな大きな扉引いても開けられないんじゃない？」

「それは大丈夫。引くのは簡単だから。」

また、みんなで再び笑つた。

「教えてくれてありがとう。ユウ。オレはハルト。そして、こっちにいるのが友達と妹のアミ。よろしく。」

「ダイスケだ。」

「ミナです。」

「サキです。」

するとコウが、

「よひしぐ。お兄ちゃん達も、『七不思議ゲーム』に参加しに来たの?」

「うん。やつだよ。とにかくなんでもいいんだろ?」

「それは……」

コウは言葉を詰まらせた。そういえばなぜ中学生にもなっていない小学生が、こんなオレ達でも不気味といえる場所で一人でいるのが不思議だった。何か事情があるのだろうか?

「お母さん……」

「え……?」

「お母さんを待っているの。」

「コウのお母さんもこれに参加しているか!?」

オレはコウの肩をつかんで言った。

「うん。ここに来る前にボクのお父さんが亡くなっただ。それでお母さんが朝から晩までずっとずっと泣いていたんだ。そしてボクがまたまた見たインターネットの掲示板に『七不思議ゲーム』をクリアすると何でも願いが叶つて書いてあったから、お父さんを生き返らせるためにボクとお母さんでここに来たんだ。でも、お兄ちゃん達も体験したよね。階段が崩れるのを……。それでお母さんが危険と判断したのかここで待つて起きなさいって。絶対に迎えに来るからって。それからずっとボクはお母さんを待っているんだ。」

「……」

オレはこの子にかける言葉をいろいろ頭の中から探し出していくなかつた。するとサキが

「ねえコウ……くん。お姉ちゃん達とお母さんを探しに行かない?」

「え……」

「ちよ……何言つてんだよ、サキ!」

「コウくん……このゲームは世界中で行方不明者を出している危険ゲームなの。もしかしたらあなたのお母さんも……」

「おいつサキ!」

オレはサキの無責任の言葉に怒りがこみ上りってきた。

「だつてハルト、コウくんのお母さんがもし行方不明だつたら、いつ迎えに来るか分からんんだよ。だつたら一緒に行つて探した方がいいよ。」「でも……」

「……ボクも……、ボクも連れてつて!」

「……」

「このままお母さんを待つのは嫌だつ! 自分でお母さんを探しに行く!」

「コウ……。でもこの中は危険がいっぱいなんだよ。」「

「分かつて。それでもいいんだ!」

「よーし! 話はついたといひことで、行きますか!」

「ダイスケ……」

「ほらっせつと行くぞ! ハルト。そしてコウ。」「うん。」

そしてまた『七不思議ゲーム』に参加する仲間が増えた。ハルト、ダイスケ、サキ、ミナ、アミ、そしてコウ。オレ達は、ただレポートのためだけに来ただけだ。なのに人数が増えサキの叔父さんの奥さん、そして、コウのお母さんを捜すことになつた。そして、オレ達は扉の前にたち、思いつきり扉を引いた。その時オレの背中には責任と不安という重荷がのしかかっていた。そして六人は扉の中に入足を踏み入れた。一步一步と……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7358u/>

八不思議

2011年10月9日10時19分発行